

移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代後期

ワイアルア耕地監督・新婚の頃

飯 田 耕二郎

はじめに

- 1．ハワイへの再渡航
- 2．ワイアルア耕地の監督
- 3．末光ヒサとの結婚
- 4．亜米利加丸事件および布哇日本人会など
- 5．長女の死とテキサス行き

はじめに

筆者はさきに『大阪商業大学論集』第160号において、星名謙一郎がハワイ到着後にさまざまな職業に就いたことを紹介したが¹⁾、その概略を示す資料『新布哇』の改訂増補版(1902年)で彼の履歴について次のような捕捉の記述がみられる。コーヒー栽培のところから引用しよう。

既にして^{コーヒー}茄菲栽培熱の昂騰するや布哇島オーラ 地方にその栽培を^{はじ}初め頗る隆昌の運に乗ぜしが該熱の冷却するに先だち早くも去ってオアフ島ワイアルア耕地の監督となり数百の労働者を手足の如くに指揮せしが時運の一転廻を見るや忽ち耕地よりその足を濯ぎ^{すす}將に大に飛躍を試みんとし今はワイキ、海岸に瀟洒たる邸宅を構えて静に其丹田を洋南の長風に払はしむ²⁾(ルビは筆者)

最後の部分は、ワイキキの邸宅で臍の下を太平洋の遠くからの風に当ててのんびりしているということだろうか。本稿では以上の記述を参考に、当時のハワイにおける日本語の主要新聞である『やまと新聞』の記事の中から星名および同夫人の名前が出てくるものを拾い出して、1898～1904年頃の彼の行跡と彼を取り巻く人物について詳しく述べるものである。

1) 拙稿「移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代前期 キリスト教伝道師の頃」(『大阪商業大学論集』第160号、2011年) 27-28頁。

2) 藤井秀五郎『改訂増補新布哇』(文獻社、1902年)「附録在布哇日本人出身録・各業列家」3頁。

1. ハワイへの再渡航

星名は明治29(1896)年9月に獄に入ったという記事の後、『やまと新聞』の記事は10月末から翌30(1897)年6月末までのマイクロフィルムがほとんど抜けており、この間の彼の動向が残念ながら明らかでない。しかしこの間に一度、日本に帰っている。それが何時かは不明であるが、外務省外交史料館の海外旅券下付表の明治31(1898)年の愛媛県の綴りに彼の名前が残っている。

住所「松山市杉谷町二〇」、年齢「三一年十一ヶ月」、渡航主意「商業」、渡航先「布哇」、旅券下付月日「三十一年八月十七日」となっている。杉谷町は現在、緑町となり、松山城の北麓にあたる。昔は土族屋敷があったらしいが、現在その面影はない。ここに彼の親族のたれかが住んでいたのだろうか。

そして『やまと新聞』の1898年9月1日の記事に「星名謙一郎氏遠からず帰島する筈」。³⁾とある。また Hawaii State Archives に残された船客名簿の資料には、「Hoshina, K. Age—36 Male(Cabin) 1898.Sept.2 S.S.Coptic—Yokohama—Japan—Coffee Planter」とある。ここで年齢が36というのは誤りと思われるが、9月3日の『やまと新聞』ではさらに詳しく「コプチック號来る 同號は昨日午後五時横濱より入港す。上等客には辦理公使内田康哉氏、熊本移民會社の井上敬次郎氏、ハワイ島の星名謙一郎氏、小倉商會の松村千次郎氏の四名にて、郵便局員中城多四郎氏と海外渡航株式會社取扱契約移民二百八名を乗せて入港す⁴⁾」。(句読点筆者)

星名と同じ上等客としてやってきた井上敬次郎は、『大日本海外移住史 第一編 布哇』(1937年)に、「昔、移民会社の主領株(熊本移民)で布哇を唯一の吐出地として辣腕を揮ひ、兎も角も我邦の海外発展に貢献した人である。後、東京の電気局長になり、是れ亦た大に聲名を馳せた、熊本出身で竹を割った様な肌合の人である。現住所 東京都渋谷区代々木富ヶ谷町一四六三」(読点は筆者)⁵⁾と紹介され、また別の書物では「井上らがホノルルの電車を見て日本に帰ってから、星亨を動かし遂に今日の東京市電の前身である電鉄事業を起こし、井上氏はその社長に就任した。そして後にそれが市の経営に移されるや、氏は初度の東京市電気局長になった。」⁶⁾とある。つまりホノルルにすでに誕生していた電車がモデルになって東京の市電ができたというのである。

彼については、国会図書館に關係文書が保管されており、その書簡のうちの7通が同船の内田康哉からのものである。明治・大正・昭和の3期にわたって外務大臣をつとめた内田は慶応元(1865)年生まれで、文久元(1861)年生まれの井上とは4歳違いで同じ熊本県出身、当然親しい間柄であつたらう。ハワイにやって来た同じ9月の22日にホノルル総領事館内で内田公使を慰労し斉藤幹領事を歓迎する宴会が催された。その出席者の名は当時のホノルルにおける代表的日本人が連なっており興味深い。内田は同月24日には帰国の途について

3) 『やまと新聞』第312号。

4) 『やまと新聞』第313号。

5) 藤井秀五郎『大日本海外移住史 第一編 布哇』、海外調査会、1937年、下編33頁。

6) 山下草園『日系市民の日本留学事情』(文成社、1935年) 369頁。

7) 『やまと新聞』第322号(1898年9月24日)。

8) 川添樫風『移民百年の年輪』(同刊行会、1968年) 194頁。

いる⁷⁾。来布の目的は、米布合併後における在留日本人の権利利益を保護すべく、米布合併協議委員およびハワイ政府と協議するためであったという⁸⁾。

小倉商会の松村については、以前に拙稿「明治中期・大阪商人による移民斡旋業」で紹介したが⁹⁾、すでに明治28(1895)年頃より移民取扱代理人としてホノルル支店に在勤し、在留日本人の間で名が知られていた人物である。また中城多四郎は自由移民として渡航したものとされ、『改訂増補・新布哇』の「在布哇日本人出身録」に「中城多四郎、大阪府北河内郡牧野村大字小倉、ホノル、府、明治三十二年八月渡布郵便局員¹⁰⁾」とみえる。彼はホノルルでも郵便局員だったらしく、3年後の明治34(1901)年4月6日『やまと新聞』の記事に「中城多四郎氏は病氣保養の爲め今般郵便局勤務を辞されたり¹¹⁾」、さらに同年7月16日では「中城多四郎氏は本日発のドーリック号にて帰朝されたり¹²⁾」とある。

2. ワイアルア耕地の監督

星名がハワイに戻った直後の『やまと新聞』の記事としては、1898年9月27日に「星名謙一郎神田伝^{ママ}導士の両氏は過日出府の處本日帰島されたり¹³⁾」。同志社出身の神田重英牧師は当時、ハワイ島コハラに赴任していた。また同年10月4日「星名謙一郎氏一昨日ヒロより来り今朝帰¹⁴⁾」とあり、彼は依然としてハワイ島ヒロを拠点にしながら、たびたびホノルルに来ていたことが知れる。そして同年11月24日の記事で「ワイアルア耕地出張 ワイアルア耕地出稼契約移民に関する事にて、森岡商会の水野氏、日本移民會社の増田氏、小倉商會の來住氏は本日午前の列車にて同地方へ赴かれたり。明後日帰府の由¹⁵⁾」(読点筆者)とみえる。ワイアルア耕地はオアフ島北部にある有名な砂糖耕地であり、当時日本人が多数集まっていた。

記事中の森岡商会の水野波門については、当時のハワイ日系社会で有名人であったにも拘わらず、従来ほとんど紹介されることがなかったので、ここで彼のこの時までの履歴を述べることにしよう。『移植樹の花開く』という書物によると、彼は水戸藩士、当時自由党の志士¹⁶⁾、とある。外務省外交史料で明治29(1896)年8月に彼が移民取扱代理人として森岡商会に出した履歴書によれば¹⁷⁾、「本名は水野七三郎、原籍は群馬県西群馬郡渋川町(現在の渋川市)527番地で狩野定三郎の同居士族、現住所は布哇共和国ホノル、府カマケラ新地、元治元(1864)年7月17日生れ」とある。学歴は記されていないが、「明治19(1886)年2月、英語教師として群馬渋川町に赴く。同年7月、小学高等科教員検定試験を受け、西群馬

9) 拙稿「明治中期・大阪商人による移民斡旋業 小倉商会および南有商社による草創期ハワイ移民の場合」(『地域と社会』創刊号、1999年) 73頁。

10) 藤井秀五郎『改訂増補・新布哇』(文獻社、1902年)「各業列家」73頁。

11) 『やまと新聞』第685号。

12) 『やまと新聞』第726号。

13) 『やまと新聞』第323号。

14) 『やまと新聞』第326号。

15) 『やまと新聞』第347号。

16) 川添樫風『移植樹の花開く』(同刊行会、1960年) 211頁。

17) 外務省外交史料(3-8-2-46)「移民取扱人森岡真業務関係雑件」(第一巻)

片岡第二高等小学の首座訓導を拜命。明治22(1889)年9月、学術研究の目的を以て米国旅行券を受け(身元引受人は渋川町酒類醸造業の狩野定三郎)、同10月桑港(サンフランシスコ)に着する。明治24(1891)年、桑港ハミルトン普通学校を卒業し、桑港高等学校に入りたるも、都合により退学する。桑港日本新紙発行の処、第十九世紀新聞社に入り、記者として従事する。明治25(1892)年12月、桑港日本人愛国同盟の幹事(同盟総理の職)に選挙される。明治26(1893)年9月、布哇在留日本参政権獲得の運動を励まさんが為、印刷器械を持って布哇国に渡来し、「第二十世紀」を発行する。明治27(1894)年ダブリュー・シー・ピーコック商会に書記として雇われる(同年10月1日より現在)。身元引受人は木村齊次。」となっている。なお、ピーコック商会はホノルルで当時有名な酒屋であったが、こののち彼は森岡商会の布哇支店長となり、『やまと新聞』の社主も兼ねていた。しかし翌1899年12月に病氣療養のため日本に帰ったあと残念ながら早世した。

さてハワイ島ヒロからホノルルにたびたび来ていた「星名謙一郎氏当分ワイアルア留るべし¹⁸⁾」(1898年11月29日)。同日の別の記事には「契約労働者の解放 ワイアルア耕地に出稼せる日本人労働者にて、本年五月までの分男子八十七名、之れに伴ふ女子二十名は本月三十日を以て解放され、何れも自由の身と成るなり。其次第を聞くに同耕地は是れまでハルステッド兄弟会社の所有なりしに、いつぞや記したる通り新設ワイアルア農業会社に其所有を譲りたるより、ハルステッド会社は消滅したり。依て契約移民は素とハルステッド兄弟会社と契約したるものものにて、新設の会社とは何の関係もなくなりたるより、遂に解放されたるなり因に云ふ森岡、日本、小倉の三会社代理人等が過日出張したるは此事に関係したる訳なりと」(句読点筆者)とある。

ワイアルア農業会社については、W.H. ドランスらによって次のように紹介されている。

ワイアルア地域の製糖業は、もともと1875年にロバート・ハルステッドが2人の息子と「ハルステッド兄弟」という名前でプランテーションを始めたのが最初である。しかしこの小さな農場は、大量の貨物輸送をもたらさなかったし、多くがハワイ現地人の所有する無数に区画された未開墾の数千エーカーの土地に囲まれていた。鉄道の実業家であったベンジャミン・ディリンガムはキャッスル・アンド・クックに、ハルステッドの所有地と小さな区画を獲得することを奨励した。ディリンガムはすでに多くの周囲の土地を借りていた。キャッスル・アンド・クックは、1898年にワイアルア農業会社を作り、ディリンガムの保有する土地を又借りしたり、ビショップの地所から他の土地を借りたり、隣接した区画を借りたり買ったりする交渉をした。1898年の末までにハルステッド製糖工場は取り替えられ、1年後にワイアルア農業会社の最初の作物が収穫され、1741トンの砂糖を収穫した。このプランテーションは最初の支配人にめぐまれて出発した。ウィリアム・グデールといい、彼は1898年に雇われて順調に25年間を過ごした。彼はここに来る前、ハワイ島やマウイ島のプランテーションで約20年間を過ごした。その経験もあり彼の砂糖農場の知識は抜けない経営で示された。1905年までに生産は1万9772トンに上昇した¹⁹⁾。(筆者訳)

18) 『やまと新聞』第349号。

星名はハワイ島から突然にオアフ島のワイアルアにやってきたが、実はウィリアム・グデールとの関係があったからではなかろうか。2人はどちらも以前ハワイ島のプランテーションにあって懇意の間柄であり、星名はグデールに請われて耕地監督あるいは契約移民との交渉のためにやってきたのに違いない。グデールは熱心なクリスチャンで、親日家として知られていた。ともあれこれ以後、星名はワイアルア耕地に留まることになる。その後、彼に関する記事はしばらくみられず、翌明治32（1899）年は次の記事のみである。9月26日「星名謙一郎氏は肺病の為日本人病院へ入院されたり²⁰⁾」。さらに同年10月初めから明治33（1900）年7月初めまでも『やまと新聞』の記事は残されておらず、また彼がワイアルアに滞在していたこともあってか、その後1901年の彼の結婚に至るまで彼の動静を知ることができない。なお1899年のハワイの住所録『Directory and Hand-Book』の「ISLAND OF HAWAII」に「Hoshina, gen mdse, Olaa」とあり、彼はハワイ島オーラーで雑貨店をやっていたことになる。

3. 末光ヒサとの結婚

星名謙一郎と末光ヒサ（久子）との結婚について、まず末光ヒサの生い立ちからみていこう。彼女は明治7（1874）年6月に伊予国卯之町（現在の愛媛県西予市宇和町）に生れた。父は末光三郎、母はチカで、彼女は男3人女6人の兄弟中5番目に生れた。地元の開明学校を卒業し、星名と同じ吉田町の油を商う浅野家に嫁ぐが失敗、したがって星名とは再婚ということになる。のち裁縫などを修得し、明治28（1895）年上洛して、同志社女学校普通科2年に編入され、明治31（1898）年6月これを卒業し、さらに専門部英文学科にすすんでいる。彼女が晩年に書いた手書きの履歴書では、その後は次のようになっている。

明治32年7月 家事都合により右退学

明治32年7月より36年7月迄 布哇在、米婦人ミセス・ウィリアムに就いて洋裁縫、刺繍を学び、ミセス・ピカントに就き家事を学ぶ。

ハワイに行ったのはこの時代、当然結婚のためであるから、これによれば、結婚は明治32（1899）年ということになる。またこれとは別の「辞世のことは²¹⁾」にも、明治32年布哇在住の星名謙一郎と結婚したとある。

ところが外務省外交史料館にある「海外旅券下付表」の明治34年度（1901年）の「愛媛県庁」の項に、末光ヒサの名がでており、年齢「二十六年十月月」、旅行地名「布哇」、旅行目的「婚姻ノタメ」、下付月日「三月十二日」となっている。明らかに明治34年（以降）結婚のためハワイに行ったことになる。また彼女が学んだ同志社女学校の同窓会から発行された『同志社女学校期報』によれば、明治34年6月発兌の第16号に、「末光久子は保科謙一郎と

19) Willam H.Dorrance and Francis S.Morgan "Sugar Island" Mutual Publishing,2001. pp47-48.

20) 『やまと新聞』第467号。

21) 星名ヒサ（弟末光信三代筆）「故人のことは」（昭和29年5月9日）。

結婚の約整ひ今春布哇に向て御出立の途次来校せられたり其住所はハワイホノル、」という記事がみられる。これより前の同じ期報の明治33年2月発兌の第13号には、「末光久子は伊予卯之町末光三郎方。去夏兄君〔長兄の類太郎 筆者注〕を失はれし御不幸に引続き御両親の御体すぐれざるより知子(妹トモ 筆者注)と共に家政を助けらる」とある。したがって、明治32年結婚というのは彼女の記憶違いで、その年に中途退学し、いったん故郷の卯之町に帰り、明治34年春にハワイに渡航し、結婚したのに違いない。星名家の伊予吉田と末光家の卯之町は隣町で、彼が幼少の頃、明治14(1881)年に東京上野で開催された内国勸業博覧会に故郷の愛媛から視察に訪れた際、末光ヒサの父三郎もこれに同行していた。つまりお互い顔見知りで、しかも両家とも地方の名家ということで、結婚話が進んだものと思われる。星名が明治31年に一度帰国したのもこの結婚と関わりがあるかもしれない。

それはさておき『やまと新聞』の明治34(1901)年には次のような記事がみられる。4月20日「日本丸 全船は一昨日午後四時頃顔を見せ全六時入港せし、船客の重なる人は北京京城の際有名なりし米国公使コンガー氏、同夫人令嬢ミスピース、及び土木学士ゼームソン氏等にして、日本人は大審院判事とか申す鈴木氏、本社主大塚静雄、同夫人、露無牧師、星名氏の未来の夫人、及び小澤健三郎氏の令妹等なりし²²⁾」(読点筆者)。大塚は『やまと新聞』の社主。露無文治は同志社出身の牧師で、アメリカ留学に向かう途次ハワイに寄った。同年8月27日にはハワイから本土に向かっている²³⁾。ところで彼女が初めてホノルルに到着した時の想い出話として「日本では港に行くのに人力車を使っていったのに、ハワイに着くとひとりだけで走る車があったのでびっくりした」という²⁴⁾。当時、国内はまだかなり交通が不便だったのに対し、ホノルルでは自動車が発達していたことが知れる。そして早速、結婚式の記事がみられる。4月23日「星名謙一郎氏の結婚 同氏は昨廿一日午後五時増田氏邸に於てデッカー判事に依り今度日本より来布されし末光久子と目出度華燭の式を挙げられ午後七時よりワイキ、なる望月海水浴に於て知友諸氏を招きて披露の宴を張られたる由当夜招かれて参会せし人々は齋藤領事、松下、志保澤、増田、尾澤、袋田、深尾、勝沼等の諸氏及び各夫人、奥村夫人、齋藤嬢、甲賀嬢、豊田嬢並に今西、千屋、増田(榮一)、小野寺、岡部、相賀、郡司等の諸氏にして大塚高太郎は新夫人の親戚総代として列席され和気洋洋の中に義太夫の余興等あり一同歡を尽して十一時頃散会せりと因に云ふ新夫婦は同夜モアナホテルに一泊の上本日午後三時十五分²⁵⁾」。以下判読困難だが、この頃のオアフ鉄道の時刻表によるとホノルル発カフク行が午後三時十五分²⁶⁾なので、おそらく鉄道で星名の住むワイアラアに向かったものと思われる。

この結婚式で数多くの人物が登場するが、ここで主な人物を紹介しておこう。

まず結婚式の行われた増田氏邸のあるじは日本移民合資会社の増田知次郎であり、彼については以前に筆者は彼の生涯をまとめたことがある²⁷⁾。そのあらましを次に紹介しよう。

明治29(1896)年に日本移民合資会社の移民取扱代理人許可願に添えられた増田の履歴に

22)『やまと新聞』第691号。

23)『やまと新聞』第743号(1901年8月24日)。

24)星名ヒサの娘である江上幸子氏による。

25)『やまと新聞』第692号。

26)『やまと新聞』第709号(1901年6月1日)。

27)拙稿「ハワイ移民会社業務代理人・増田知次郎について」(『季刊汎』4号、1987年)178~179頁。

よると、「明治4年に生れ、同15年愛媛県今治小学校卒業、18年京都同志社入学、24年普通科卒業、同年政法学校入学1ヶ年修学、25年商業実視の為め布哇国へ渡航外国商館で実修、28年帰朝し大阪の柳瀬誠三郎貿易商店を布哇国ホノルル府に設立するに際し同店支配人として再渡航し目下在留中」とある。星名夫妻とは同じ愛媛県の出身で、同志社で学んだキリスト教信者ということもあり、彼が最初にハワイに来た頃から星名とは顔見知りであった可能性が高い。日本にいったん帰って1896年に代理人になった後、先のワイアルア耕地への出張など契約移民のことで各地に赴いた記事が『やまと新聞』たびたびみられる。1899年の同新聞の広告記事では、フォート街スプレックル銀行2階に事務所を置き、「家屋地所売買及借家、労働者周旋、建築事業請負、税関手続、諸帳簿整理、其他一般事務を取扱ふ」として、この時、耕地行き労働者を300名募集している。またちょうどこの頃発行された『新布哇』の「在布日本人出身録」では、彼について次のように評している。「君は年齢三十に満たず既に萬金の富を致しホノル、府には輪奐たる邸宅を構え其前途に於ける幾多の有望なる事業を現に企劃しつつあり君にして努めて休まずんは富力の益々加ふると共に其商智商器に更に幾層の老練を来すべし²⁸⁾」。とにかく当時巨利を博していた移民会社の代理人のなかでも、彼は生来の才能を十分に発揮し、若くして最も羽振りがよかったのではないかと思われる。1900年11月、彼は村上良子と結婚するが、その披露宴はワイキキの彼の別邸に於いて内外の貴婦人紳士数百名が集まった²⁹⁾、とある。星名の結婚式もここで行われたのかもしれない。増田はその後、1902年9月に突然、ニューヨークに出発し、翌1903年2月に彼の地で急死した。同年2月28日の『やまと新聞』は次のように報じている。「増田知次郎の訃音 昨年まで当府にありて敏腕家を以て聞こへたる同氏は此程紐育にて歯痛療治中敗血症に變じ死去されし由なり³⁰⁾」。ハワイでも彼の死亡広告が友人である志保澤、星名、石川の名でその後数日にわたって掲載された。なお、尾澤忠元も日本移民合資会社の代理人で、増田栄一（英一）は増田知次郎の弟である。1901年8月24日の記事によると、彼は郷里の中学校を出て同志社政法部に学び、さらに早稲田専門学校に移り英語政治科を修め、昨年卒業して今春ハワイにきて滞在していたが、8月27日に米大陸に向かい、コロンビア大学に入学予定とある³¹⁾。

また親戚総代として日本からやって来た大塚高太郎は、星名や末光ヒサの父・三郎などとともに東京への視察旅行の同行者の1人であった。『明浜町誌』によれば、彼は安政6（1859）年生まれで星名より7歳年長で、やはり愛媛県東宇和郡の有力者として狩江村（現在は明浜町）の初代村長を明治22（1889）年から1900年までつとめている。その後、俵津村長を経て、山下汽船の支店長として台湾に渡ったが、大正12（1923）年に同地で死去とある³²⁾。山下汽船との関係については、社長の山下亀三郎が星名と同じ吉田町の出身で、彼も親しい間柄だったためだろう。彼はヒサの親戚と記事中にあったが、末光家の関係者によると、謙一郎の姉ヒロの嫁ぎ先が大塚家ということで、星名家の親戚になる。

深尾泰次は当時、星名の住んでいたワイアルアの基督（キリスト）教会の牧師、勝沼富造

28) 藤井秀五郎『新布哇』（大平館、1900年）、「在布日本人出身録」64頁。

29) 『やまと新聞』629号（1900年11月13日）。

30) 『やまと新聞』1068号。

31) 『やまと新聞』第743号。

32) 明浜町誌編纂委員会編『明浜町誌』（明浜町役場、1986年）1138頁。

は有名な獣医師、今西兼二は横浜正金銀行布哇出張所支配人で、この頃商人同志会会長や慈善会会長も兼ねており、ハワイ日本人における最有力者であった。いと子夫人は小澤健三郎の姉である。袋田喜一郎は日米雑貨帽子類卸小売の袋田商店主、千屋正信も日米雑貨食料品卸小売の千屋商店主で、小野寺壽雄は広島移民会社の代理人、相賀安太郎は拙稿「移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代中期」³³⁾にも登場するが、この頃は布哇新報社の記者であった。郡司五郎も日本語新聞「新日本」の社主である。

披露宴の行われた望月はワイキキにあった料亭で海水浴場を設けており、当時の日本人の上流階級やインテリ階級の遊び場であった。いわば現在のワイキキのリゾートホテルのような所であったと思われる。また星名夫妻が泊まったモアナホテルは現在も続く有名なワイキキのホテルで、この直前の3月11日に開業している。なおモアナとは南洋語で大洋を意味する語とある³⁴⁾。

それから1ヵ月ほど経った5月25日に「星名謙一郎 ワイアルアの同氏は昨日出府せられたるが近々当市に転住せらるゝことになりたる由³⁵⁾」とあり、彼はそれまでオアフ島北部のワイアルアに居を構えていたが、同じオアフ島のホノルル、多分ワイキキに住むことになった。ホノルルでどういう新しい職に就いたのか、あるいはワイアルア耕地での監督を続けながらの転居であったのかは明らかでない。

4. ^{アメリカ} 亜米利加丸事件および布哇日本人会など

ハワイ日本人移民史のなかで、契約移民の廃止された1900年から日米紳士協約の実施により日本からの移民が禁止された1908年までを自由移民時代と呼んでいるが、この時代は契約移民時代に受けた屈辱を払いのけ、人権を確立しようという革新気分の溢れた時代だったという。この時代に起こった五大事件の1つがいわゆる「亜米利加丸事件」といわれるものである³⁶⁾。これは明治34(1901)年7月25日に横浜より入港した東洋汽船会社の亜米利加丸の船客中に、1名の黒死病(ペスト)疑似患者があり、それがもとになって突発した事件である。伝染病患者の存在の報告を受けた検疫官が船客一同を検査するに当たって、白人船客には通過させただけなのに、東洋人船客には下等、中等、上等の順に男女船客の全部に、医師の手が脇の下と、腿のつけ根のリンパ部に触れる検診が行われ、とくに上等船室にいた日本婦人たちにも同様な検査が行われたとして騒ぎとなったのである。この報道が伝えられると、前年にペスト焼き払い大火があった直後でもあり、ホノルル日本人の間で一大騒動となった³⁷⁾。ところが日本総領事館側では、斉藤総領事をはじめとして問題を大きくしたくな

33) 拙稿「移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代中期 新聞発行・税関吏員・コーヒー農場主の頃」(『大阪商業大学論集』第164号、2012年) 15-16頁。

34) 『やまと新聞』第675号(1901年3月12日)。

35) 『やまと新聞』第706号。

36) 川添樫風『移民百年の年輪』(同刊行会、1968年) 211-213ページ。

37) 相賀安太郎『五十年間のハワイ回顧』(同刊行会、1953年) 114頁。および山本英政『ハワイの日本人移民』(明石書店、2005年) 194頁。とくに後者は1章を設け、この事件の経過について詳しく述べられている。

いという意向であった。日本人達はアメリカ側の非を糾明するため、8月2日夜ホノルル日本人小学校構内で、在留民大会を開催したが、2000名を超える日本人が集まり、当時の代表的日本人が熱弁を振った。この大会の決議文が合衆国の大統領や国会上下両院などに送られ、結局アメリカ側の陳謝となり、問題の検疫官はハワイ日本人の要求通りに更迭されるに至った³⁸⁾。この事件の経過のなかで星名が登場する記事がみられる。事件直後の7月27日の「日本人屈辱事件」と題するもので、星名は19名の代表者の1人として、船客交渉委員を石川淡、鹽田奥造、増田知次郎、尾崎三七、大塚長雄とともに務めている³⁹⁾。このうち石川は『やまと新聞』の編集人、鹽田は京浜銀行ホノルル支店長、尾崎は食料雑貨金物酒類を扱う尾崎商店主で、この頃は前年のベスト焼き払い事件「被害者代表委員会」の委員長でもあった。

翌月の8月27日の記事には同月24日付の「御礼広告」が煤孫龍之助の名で出され、入院中の訪問に対するお礼として多くの名前の中に星名謙一郎の名前が挙がっている⁴⁰⁾。煤孫は当時有名な写真館主で、この頃の広告に「すすまご写真館・ホノルル第一等の写真師」とあり、当時の日本人社会のなかで様々の活躍がみられた。また10月19日には慈善会入会者の中に終身会員として星名謙一郎・同夫人の名前がでている⁴¹⁾。

日本人慈善会というのはすでに明治25（1892）年、メソジスト教会牧師であった砂本貞吉によって設立された団体で、その目的は「在布哇同胞中病氣並びに災厄等不慮の不幸に罹り、自救の途なきものを救恤し、其他一般の公益に関する慈善事業をなす」にある⁴²⁾。同会は1900年に日本人慈善病院を設けた。1901年のこの時に会長が今西兼二から毛利伊賀に交代している。毛利は医師で慈善病院の院長でもあった。彼の姉が先に紹介した今西兼二夫人である。

先述の亜米利加丸事件をうけてホノルル同胞間に布哇日本人会が急設された。同年11月7日の記事で「布哇日本人会役員選挙の結果 過日の総会に於て選挙せし布哇日本人会の役員及び評議員の投票は一昨夜青年倶楽部に於て創立委員諸氏立会の上開票せし結果左の諸氏当選せられたりと 会長鹽田奥造 副会長石川淡 理事小澤健三郎 書記相賀安太郎 会計尾崎三七 同千屋正信」そして評議員として星名謙一郎ら20名の名が連なっている⁴³⁾。このうち小澤健三郎はハワイ元年者の1人である小沢金太郎の子供で、明治10（1877）年ハワイ生まれの二世。1899年に熊本移民会社の代理人として聘せられ、1902年より布哇耕主同盟会の労働部エージェントの要職にあった⁴⁴⁾。

1902年は1月に日本語新聞『布哇新報』前主筆の高橋正次郎の長男である一夫が亡くなった。1月21日の記事中に「高橋氏令息の葬儀 は既報の如く去十八日午後三時志保澤氏邸に於て執行されしが先づ小室氏司会の下に同氏の聖書朗読、川崎氏の祈祷、星名氏の履歴朗読、増田氏の吊辞、本川牧師の祈祷及び説教、親族総代志保澤氏の挨拶等ありて式を終へ会葬者百余名に送られマキとなる日本人墓地へ埋葬されたりと」そして親戚志保澤忠三郎・相賀

38) 前掲注36)に同じ。

39) 『やまと新聞』第731号。

40) 『やまと新聞』第744号。

41) 『やまと新聞』第765号。

42) 藤井秀五郎『大日本海外移住史 第一編 布哇』、海外調査会、1937年、中巻3頁。

43) 『やまと新聞』第770号。

44) 前掲注37) 107-108頁。

45) 『やまと新聞』第798号。

安太郎、友人千屋正信・星名謙一郎の名で1月18日付の死亡広告が掲載されている⁴⁵⁾。高橋と志保澤は実の兄弟で、相賀もこの一家と親戚同様の付き合いがあり、高橋夫妻と同じチャイナ号で明治29(1896)年ハワイに渡航している⁴⁶⁾。また本川源之助牧師は日本人美以(メソジスト)教会の牧師であり、川崎喜代藏は川崎旅館主で、日本人メソジスト教会の熱心なメンバーであった。彼等と星名との親密な関係がしのばれる。

続いて2月1日には「大塚和氏の自殺 当地星名謙一郎の甥なる大塚和氏(廿四)は昨年渡布されてより以来常に星名氏の事業を援けて勤勉の聞へ高く有為の青年を以て目され居りしに去月廿九日の朝ワイキキなる星名氏邸に於て主人夫婦の他出中一通の遺書をのこし猟銃を以て自殺せられたり其遺書に依れば氏が廿余年の生涯は悉く失敗を以て充たされ万事意の如くならざるを果敢なみて遂に此無惨の拳に出でたるなりと葬儀は翌三十日午後二時同邸に行はれマキキ墓地へ埋葬せられたり」という記事そして親戚星名謙一郎、友人今西兼二・志保澤忠三郎の名で1月31日付の死亡広告が掲載された⁴⁷⁾。大塚和は先述の大塚高太郎の長男で⁴⁸⁾、星名の結婚式のあと謙一郎を頼って愛媛からやって来たものと思われる。

2月7日には日本人会評議委員会が開かれ「船木喜三郎の裁判に関し更に弁護料二百五十弗の出所に付ては委員三名を選びて寄附金募集を托することとし勝沼富造星名謙一郎石川淡の諸氏当選(以下略)⁴⁹⁾」とある。これは貧苦に迫られて実子を殺し、世の慈善家より異例の同情を受けた船木喜三郎が、この後裁判で無罪の判決を受け、家族と共に同月23日に帰朝したが⁵⁰⁾、日本人会が彼のために寄附金募集に動き、星名もその役割の一端を担ったというのである。

翌2月8日に「布哇のか、み 敢て両君に献策す 局外生 今度の富籤一件に付て志保澤、星名の両君をダシにつかたと云ふので両君より取消を兼ねて百弗の懸賞広告が出ました、果たしてダシにつかわれたとすれば、如何にもお気の毒千萬といふの外なしたが、夫にしても百弗の懸賞広告は余り御大層にはあらずや、膽力家を以て有名なる両君…山が崩れてもビクともせぬらしい両君…が、市井の一風説にウロタエて大層な広告を出されたことは両君の為めに取らざる所なり(後略)⁵¹⁾」という志保澤、星名の2人を皮肉った記事がみられる。これは直前の2月6日「富籤の発行に就て」によると当時、芝居興行の福引として富籤を発行したが⁵²⁾、その際に発起人の仲間として彼等の名前が使われたものと思われる。いわば有名税というべきものであろうか。結局、この富籤の結末は有耶無耶となってしまった⁵³⁾。

これまでも名前がしばしば登場する志保澤忠三郎について紹介しておこう。彼については当時の有名人でいろいろな書物で述べられているが、ここでは『大日本海外移住民史』(1937年)の人物紹介の文章を次のようにまとめた。

46) 前掲注37)、4-6頁。

47) 『やまと新聞』第802号。

48) 前掲注32)に同じ。

49) 『やまと新聞』第805号(1902年2月8日)。

50) 『やまと新聞』第811号(1902年2月25日)。

51) 前掲注49)に同じ。

52) 『やまと新聞』第804号。

53) 『やまと新聞』第810号(1902年2月22日)。

慶応2年東京生れ、氏は語学に堪能で明治18年頃、20歳にしてアメリカ本土に渡り、あらゆる苦酸を嘗めつゝアラメダ・ハイスクールを卒業し、其頃桑港がバーバリー・コーストと売っていた時代に、そこに着くアメリカ軍艦に乗り込んでいた日本人船員の紹介で同船に乘組み、料理の世話や士官の世話などをしつゝ布哇にやって来たのであった。ホノルルに着いてから氏は軍艦を下りたがそれは明治23年のことであった。

布哇の人となった氏は実業界に乗り出し、オアフ島ワイアナエ及ワイパフ、モロカイ島カウナカカイに於て商店を経営し、其頃既に伊志夫人と結婚して俱に共に多大なる努力を払った。

明治27年9月1日には笠松正之助、加藤秀平氏等と共に布哇最初の邦文活字日刊新聞布哇新報を発刊して、布哇に於ける邦字新聞界の黎明期を来せるに至った。この頃から一般社会公共事業にも乗り出し、語学に堪能な関係から白人有力者との諒解運動にもつとめ、後にカーター知事などにも友人関係の親交を結ぶに至ったが、在留民の福祉増進に努めた⁵⁴⁾。

星名は彼と同年齢で相当仲が良かったようだ。彼はこの後、明治40（1907）年に一家でハワイを引き揚げ、大正の初め東京で目黒運輸自動車会社を起し、アメリカ流のビジネスにより、「黄色いパス」王として大成功を収めた⁵⁵⁾という。

1902年3月に2人の催す晩餐会が開かれることになった。2月27日にその予告記事がみられる。「晩餐会 明後一日夕方より志保澤氏邸に於て、志保澤、星名両氏の催ふしにて知友の諸氏を招きて晩餐会を開かれ晩餐会後彼の竹本寶玉をして得意の喉を弄せしめらる筈なりと⁵⁶⁾」。そして3月4日にはその夜の賑いの様子が報ぜられた。「志保澤氏邸の晩餐会 星名謙一郎志保澤忠三郎両氏の催ふしを以て去る一日の夜志保澤氏邸に於て高橋、千屋、小澤三夫人の送別と日英同盟の祝意とを兼ねて晩餐会を開かれたるが招かれて参会せし淑女紳士五十余名にして先づ両主人の挨拶、高橋夫人、塩田、斎藤諸氏の謝辞等ありたり同夜の献立中豚の丸焼きの上日、英、清三国の国旗を押し立て席の中央へ運び出して来賓を饗せられしは時節柄面白き趣向なりし夫れより例の竹本寶玉の得意の出語りに加へて来賓の飛入り出語り及び煤孫氏の新作日英同盟オッペケ節等一層の興味を添へ近来の盛会なりしが主客何れも十分の歡を尽して散会せしは十一時頃なりしと⁵⁷⁾」。

同年12月にも志保澤忠三郎氏の晩餐会が催されるが、それまでに次の3つの記事がみられる。4月19日「木村対星名事件の落着 先般木村齊次氏より星名謙一郎氏へ対し旧債二千弗の請求訴訟を提起されしが此程某氏の仲裁に依りて示談済となりたる由⁵⁸⁾」。木村とは旧知の間柄で、星名は一時、木村の家に同居していたと思われ、しかも星名がアヘン事件で捕まった際に木村が保釈保証人となって釈放された⁵⁹⁾。その保釈金が2000ドルなので、この時の借金を請求されたのかもしれない。そしてホノルル日本人教役者会発行の機関誌『ひか

54) 藤井秀五郎『大日本海外移住史 第一編 布哇』、海外調査会、1937年、下編2 - 3頁。

55) 前掲注) 37、『五十年間のハワイ回顧』、176頁。

56) 『やまと新聞』第812号。

57) 『やまと新聞』第814号。

58) 『やまと新聞』第833号。

59) 前掲注33) 17・25頁。

り』に、10月ホノルル日本人教会に3ドルの特別寄付者として星名謙一郎の名前が掲載されている⁶⁰⁾。さらに11月16日夜、ホノルル領事館からカナダ・モントリオールに転任する本部岩彦君の送別会に会した約30名の内の1人に星名の名前がみられる⁶¹⁾。

さて年末に催された晩餐会の様子は12月15日の記事にみられる。「志保澤氏の晩餐会 一昨夜望月に於て催ふされし志保澤忠三郎氏の晩餐会はキネー、マクラナハン、ビッグロー、ドール、デビー、今西、塩田、井上、毛利、内田、小林(喜)、星名、小澤、相賀、石川等の諸氏招かれて出席せしが料理は勿論会場其他総て日本風となし来賓は悉く浴衣を着し座して食卓に就くことと定められしこととて各白人来賓も浴衣着座食の掟に従ひて手つき怪しげに箸もて挟み食する所に一層興味を添へ殊にキネー氏の如き肥満の体軀を以て日本浴衣を被りたる奇観名状すべからざりしが二三紅裙(芸妓のこと 筆者注)の周旋の下に主客胸襟を開きて乾杯せし日本酒の数幾十本なるを知らず各酔の廻るに従ひ思ひ思ひの隠し芸を出して鼻うごめかし十分の快を貪り足元しどろに退散せしは十時半頃なりしか内外人打ち混じて斯かる盛會を極めしは殆ど未曾有のことなるべし⁶²⁾」。

また、12月18日には「在留貴婦人の美挙 毛利、岡部、尾崎、今西、勝木、内田、三田村、灰田、石川等の各夫人発起となり市内在留の同胞貴婦人間を誘説して応分の醸金を請ひ目下日本人慈善病院に入院中なる患者一同へ見舞品を贈らんとて頻りに奔走中の由なるが同胞婦人方にて此挙に賛同して出金を承諾せられしもの既に数拾名の多きに達したるを以て来る廿二日毛利氏邸に於て発起人諸子の會を開き詳しく打合せをなす筈なりと⁶³⁾」という記事がある。そして同月26日の紙面において、日本人慈善会の会長である毛利伊賀の名前で、24日に慈善病院の患者を訪問し、物品すなわち七面鳥5羽、鶏11羽、ベッド掛3ダースを贈った46名の夫人に対する御礼の言葉がみられる⁶⁴⁾。この中に星名夫人の名前もあり、当時のホノルルにおける日本人名士の夫人達がこぞってクリスマスのプレゼントをしたことが分る。なお毛利についてはすでに紹介したが、勝木市太郎、内田重吉、三田村敏行、灰田勝五郎も共に当時の有名な医師であり、灰田はハワイアン音楽で有名な灰田晴彦・勝彦兄弟の父親である。

翌1903年にはまず3月30日に「今西夫人の日本美術談 一昨日キロハナ大会にて、今西夫人は、日本の美術に関し一場の談話を試みられしが非常の喝采を博されし由、尚同日は星名夫人の茶の湯ありたり⁶⁵⁾」。星名ヒサが茶の湯を立てたことがしれる。次に4月6日は「星名氏のモロカイ行 星名氏は近便のキナウ号にて議員等と同船モロカイ視察の途に上られしが同じく昨夜帰府された」。同日の記事に「モロカイ行き 一昨夜十一時十分発キナウ号にて議員其他血族のもの音楽家等はモロカイ島のカラウパ、に赴ひた、昨朝同処へ着して種々先方の事情を聞き取った上昨夕出発深更帰港した⁶⁶⁾」。星名はこの時、議員達に同行してモロカイ島に赴いた。カラウパにはハンセン氏病患者の収容所があった。

60) 『ひかり』1902年11月15日号。

61) 『やまと新聞』第995号(1902年11月17日)。

62) 『やまと新聞』第1017号。

63) 『やまと新聞』第1020号。

64) 『やまと新聞』第1026号。

65) 『やまと新聞』第1093号。

66) 『やまと新聞』第1098号。

また4月14日の記事中には、日本人コック学校の寄付金名簿の中に星名が掲載され、七拾五仙（セント）寄付したことが知れる⁶⁷⁾。コック学校は元年者の一人である石村市太郎がやっていた夜間の職業学校で、明治29（1896）年に設立されたが、1903年のこの年に寄付金によって校舎を新築した⁶⁸⁾。

9月8日には「星名夫人の篤志 過日の紙上にて吉崎ヒサなるものが呼寄せられて来れるに、夫はヒサの航海中に死亡して実に途方に暮れていたが、星名夫人には其不幸を憐れみ、一室を貸し与へて救護せらるる事となりし由⁶⁹⁾」。この記事は最初、保科夫人となっていたが9月10日で星名夫人に訂正する⁷⁰⁾、とある。過日の紙上というのは次の記事である。9月5日「憐なる夫婦 香港丸にて着せる呼寄婦人の内に吉崎ヒサ（廿六）といふがあつた、彼女は山口県熊毛郡宇津村の吉崎岩吉（卅二）の妻なり、岩吉は昨年五月来布したるが、先頃妻ヒサを呼寄する事となし、早く夫婦同棲を楽しまんものをと、神妙に業務に勉強しつゝありしに、三週間程熱病に取つかれ、ウワ言の内にも妻の来る事を言ひ続けいたるが、遂に果敢なき最後を遂げたり、ヒサは来布すると直に夫の悲報に接して如何に悲歎の涙に暮れたりけん、思ひやるだに憐れなる次第ならずや⁷¹⁾」。星名ヒサはこのことを知って、救助の手を差し伸べたというのであった。同じ名前であったため親しみを感じたのかも知れない。

いっぽう夫のほうは、9月18日に「星名氏対沖氏訴訟 星名謙一郎氏より沖寛氏に対する不当利子徴収に関する訴訟は一昨日のヂッカー判事の法廷にて裁判ありたるが、初め星名氏は一割五分と云ふ法廷最高率以上の利子を課し居りし由にて、其他にも不当の廉ありて遂に全然星名氏の敗訴に帰し結局既に徴収せる全額中より九十五弗と訴訟人費を払戻すべき旨判決ありたり⁷²⁾」。彼は高利貸しもしていたらしい。この事件については、翌1904年1月28日「沖対星名事件 同件に対する被告の控訴は被告星名氏渡米につき棄却となる⁷³⁾」ということで、沙汰済みとなった。

5．長女の死とテキサス行き

1903年11月19日に突然、次のような記事が出た。「星名氏長女の永眠 星名謙一郎氏長女さち子には病中の処昨日永眠せる由、気の毒の至りなり⁷⁴⁾」。残念ながら長女の誕生を知らせる記事は見当たらない。そして11月19日および20日に以下のような広告が出ている。

「長女さち子儀病気の処養生不叶昨夜遂に永眠致候此段謹告仕候也
追て明午後二時自宅に於て葬儀執行三時出棺の筈に御座候
十一月廿一日

67) 『やまと新聞』第1104号。

68) 前掲注16) 119頁。

69) 『やまと新聞』第1226号。

70) 『やまと新聞』第1228号。

71) 『やまと新聞』第1225号。

72) 『やまと新聞』第1235号。

73) 『やまと新聞』第1336号。

74) 『やまと新聞』第1284号。

父 星名謙一郎
友人 志保澤忠三郎
大久保良太郎⁷⁵⁾

さらに11月21日は御会葬にたいする御礼の広告である⁷⁶⁾。両親の悲しみがこれら紙面を見るだけで伝わってくる。これで決心がついたのか翌年早々、2人はハワイを離れることになる。

明治37(1904)年1月6日「星名謙一郎氏のテキサス行き 永く当地にありし星名氏は今度大に思ひ立つ所あり昨日のソノマ号にて夫人同道米国テキサスに赴けり、テキサスは有名な米産地にして先に前代議士西原清東氏が挙家移住を企てたる地なるが、日本人には有望の地なる由⁷⁷⁾」。筆者はテキサスへの日本人移住について以前に「明治期・テキサスにおける日本人の米作者について」というタイトルでまとめたことがある⁷⁸⁾。ちょうどその頃、テキサスでの米作がブームとなり、事業家が日本からやってきて入植が始まった時である。同時期、『やまと新聞』にもテキサス移住についての記事がしばしば見られる。

1903年7月23日「テキサスと日本移民」と題する記事では、テキサス州デルリオ付近に日本農夫4名が働き、その成績が良好なのでその中の磯本某が日本に帰り、100名の農夫を連れてきた。また宮崎県の宮崎幾市と長津與市が米作地を実査するため5・6の日本人を引き連れわざわざ渡米したとある⁷⁹⁾。また同年9月3日「テキサスの農業」では、西原清東がテキサス州の米作地を購入し、大規模の農業に従事するため、8月19日に紐育(ニューヨーク)を発って海路テキサス州に赴いたと報じている⁸⁰⁾。

西原は高知県生まれで、衆議院議員として政界で活躍、さらに同志社の第4代社長にも選ばれたが、1902年に渡米し、コネティカット州のハートフォード神学校に入学して神学の勉強をしていた。時のニューヨーク総領事の内田定槌よりテキサス米作の話を聞き、現地を視察した後、ヒューストン市の南、ウェブスターに土地を購入して1904年より米作を開始した。星名夫妻が新天地にテキサスを選んだ理由として、西原との関係が考えられる。同じ四国出身のクリスチャンであり、ヒサ夫人が同志社女学校に在学中、西原は同志社社長であった。このような関係から星名夫妻はテキサス米作の中心人物である西原を頼って、この事業に協力しようとしたと思われる。

星名夫妻がテキサスに赴いた直後の1月11日には「大西理平のテキサス行 同氏は昨日の亜米利加丸にて一寸寄港したるが豫ねてテキサス農業に従事せる人にて今回は廿数名の移民を引き連れて同地に赴くるの途にありたるとの事也⁸¹⁾」とある。大西は愛媛県周桑郡徳田村(現在は西条市)出身で時事新報の記者をしていた。やはり内田の報告書を読み日本を出発、1903年9月にヒューストンに着いて現地を視察しいったん帰国した。そして1月28日の「ウェブスターと日本人」と題する記事で、テキサス州のうちウェブスターと称する所が最

75) 『やまと新聞』第1284号・1285号。

76) 『やまと新聞』第1286号。

77) 『やまと新聞』第1317号。

78) 拙稿「明治期・テキサスにおける日本人の米作者について」(『人文地理学の視園』大明堂、1986年)、571-580頁。

79) 『やまと新聞』第1187号。

80) 『やまと新聞』第1223号。

81) 『やまと新聞』第1321号。

も米作地に適し、大西氏の家族、西原氏の家族もこの地を選んだとある。同号のサンフランシスコの『日米』新聞を紹介した「西原清東氏の来桑及びテキサス行」という記事では、西原清東氏は妻君と長男の清顕氏が今回の便で渡米してきたので迎えに15日テキサスより桑港（サフランシスコ）に来て帝国ホテルに投宿、また大西理平氏も家族と共に17日テキサスに向かわれるはず⁸²⁾、とある。ちょうどこの1904年の年頭がテキサスの米作を家族と共に目指す人達のピークとなり、星名夫妻もそのうちの1組であった。

そして、謙一郎にとっては13年間、ヒサにとってはわずか3年足らずの短いハワイ滞在であった。

参考文献

ハワイの新聞・住所録：

『やまと新聞』

『ひかり』

『Directory and Hand-Book of HONOLULU and the HAWAIIAN ISLANDS』

書籍：

藤井秀五郎『新布哇』（大平館、1900年）

藤井秀五郎『改訂増補新布哇』（文獻社、1902年）

山下草園『日系市民の日本留学事情』（文成社、1935年）

藤井秀五郎『大日本海外移住史 第一編 布哇』、海外調査会、1937年。

相賀安太郎『五十年間のハワイ回顧』（同刊行会、1953年）

川添樫風『移植樹の花開く』（同刊行会、1960年）

川添樫風『移民百年の年輪』（同刊行会、1968年）

明浜町誌編纂委員会編『明浜町誌』（明浜町役場、1986年）

Willam H.Dorrance and Francis S.Morgan “Sugar Island” Mutual Publishing, 2001.

山本英政『ハワイの日本人移民』（明石書店、2005年）

拙稿：

「明治期・テキサスにおける日本人の米作者について」（『人文地理学の視圏』大明堂、1986年）

「ハワイ移民会社業務代理人・増田知次郎について」（『季刊汎』4号、1987年）

「明治中期・大阪商人による移民斡旋業 小倉商会および南有商社による草創期ハワイ移民の場合」（『地域と社会』創刊号、1999年）

「移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代前期 キリスト教伝道師の頃」（『大阪商業大学論集』第160号、2011年）

「移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代中期 新聞発行・税関吏員・コーヒー農場主の頃」（『大阪商業大学論集』第164号、2012年）

82) 『やまと新聞』第1336号。

その他：

外務省外交史料(3-8-2-46)「移民取扱人森岡真業務関係雑件」(第一巻)